

みつくら

令和 3年10月15日 第348号
発行 大瀬川活性化会議
編集 「みつくら」編集委員会
花巻市石鳥谷町大瀬川10-45-2
大瀬川振興センター 電話45-6472

“お～い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

板垣さんが川柳集を発刊

板垣寛さんは9月に川柳集「人生は試行錯誤の独り旅」を発刊した。本はA6版の70ページで、1月から12月に分類した240句を掲載している。

板垣さんは、昭和50年頃に藤沢岳豊氏のIBCラジオ川柳に投稿し放送されたのを機会に川柳に嗜むようになった。以後、昭和57年に二枚橋の細川一紗さんの薦めで宮野裕、清子夫妻と共に石鳥谷川柳会を立ち上げ初代会長を担った。

この240句は、石鳥谷川柳会の選に選ばれた作品を掲載したもの。その中から、10月の項で一句「紅葉狩りするときばかり過疎をほめ」。

中央長寿会が奉仕活動で環境整備

去る9月10日に大瀬川中央長寿会（菅原得之会長）は会員12名が参加してセンターと運動公園の植栽の剪定や草取りの奉仕活動を行った。この活動は毎年、敬老祭に参加される方々に思いを込めてこの時期に行ってる。

残念ながら今年も敬老祭が中止になってしまったが、それぞれに公園内の草を刈ったり、ドウダンツツジやサツキの剪定をした。今回は例年よりも参加者が少なく南側までは手が回らまかったが「サツキが成長するともっと綺麗になるな」と話しながら解散した。

基盤整備事業推進委員会からお知らせ

大瀬川基盤整備事業推進委員会（菅原教雄委員長）では、コロナ過で開催が延期されていた2回目の基盤整備区画図面（修正後）の確認を、10月19日7区公民館、20日大瀬川振興センター、21日9区自治公民館（いずれも19時から）で行うことを決めた。菅原委員長は「関係者には連絡済ですが、どなたでも参加できるので質問や意見のある方はぜひ来場してほしい」と語っていた。

また、大瀬川地内の道路沿いに外周測量のため、ピンク色の紐を付けた杭を打って地権者にはお知らせしているが、測量時にはご理解をお願いしている。

水泳で活躍しています

去る8月28日に第57回岩手県中学校学年別水泳大会中部ブロック大会が盛岡市立総合プールで開催され、7区新山の菅原瑠生（るい）君が中学校1年男子100m自由形で1位となりそして、双子の菅原瑠香（るか）さんも中学校1年女子50m自由形で1位となった。

この活躍を母親の佳奈子さんにお聴きしたところ、石鳥谷中学校には現在水泳部がなく、今年度からは部活の未加入者も認められたため、花巻東水泳教室（花巻東高校のプール）に、平日は18時～20時30分、土曜日は7時～9時の朝練と15時～17時の午後練の2回を（月曜日のみ休み）昨年9月から通っているとの事。佳奈子さんから「この大会は他の競技でいう新人戦にあたり、練習でのベストタイムではなかったにもかかわらず二人とも精いっぱい頑張ったの成績。今、コロナ禍でスイミングに通う学生が毎日の練習場所を確保するのも大変な中、この花巻東水泳教室は毎日練習できること、無観客でありながらのこの大会を開催して頂いて大変有難い」と語ってくれた。

大瀬川から邑（むら）抜けの記録見つかる（後編）

4月の1家族を加えると実に10家族が邑抜けしている。宝暦当時の大瀬川の全戸数は86戸（石鳥谷町史）であったことから実に1割が邑逃げし、大瀬川では大変な悲惨な状態だった事が判る。特に11月は6日間に、目立たないようにまとまって邑抜けしているので計画的に相談して逃げた様子が分かる。

宝暦に飢饉とは、細井計著（岩大名誉教授）『盛岡藩宝暦の飢饉とその史料』によると「宝暦の飢饉（宝暦5・6年）は、冷害からの大凶作によるもので、特に宝暦5年（1755）は、春から不順な天候で典型的な冷害となり、水稻だけでなく五穀も実らず、盛岡藩（南部盛岡藩・表高10万石）の内高に匹敵する田畑199,700石の損耗（そんもう）となった。藩では、お粥小屋を建てて飢人の救済に当たったが、施行された粥は薄く『南無カウ陀仏、ウスイ菩薩』と皮肉られるほどで、結果、餓人の多くが餓死や凍死をし、その数は盛岡藩内で49,594人に上った」とあるので、その大飢饉と困窮は目にあまる程であった。邑抜け（夜逃げ）の歴史は江戸時代中期からとかなり古く、御法度であったが、厳しい年貢の取り立てによって生活がままならない事から夜逃げが続出したと言われている。夜逃げをして邑内で耕作者が減っても、無主の田地が増えても、年貢上納は邑単位なので邑として決まっている年貢高は納めなければならず、邑としては大変な窮地に立たされたものであった。邑抜けで、耕作人口が減少すれば、邑に残った人びとが手分けして無主の田畠を耕作し、邑高に相当する年貢を納めることになっていたが、人間の労働力には限界があるので、結局、生活を切りつめて、減少した耕作者の分の年貢を負担する。あるいは借金をして、邑から割り当てられた個人別の年貢負担分を納めることになったという。発見したこの家老日記から、大瀬川の先人たちの艱難辛苦が垣間見えた。

菅原さんが新たに2冊自主製作

菅原得之さんが先月号で記載した「大瀬川の居住と屋号」に続いて「大瀬川の消防」（B5版52ページ）と「大瀬川にかかわる唄」（A5版29ページ）の2冊を自主製作した。

「消防」では、大瀬川消防の歴史の他に1997年5月の大規模山林火災の発生時間から分刻みで記載されている。また、「唄」では、大瀬川小学校校歌や地域の祝い唄・賛歌が記載され解説も添えている。

菅原さんは、40年以上から常に手帳を持って集会や行事などで参加者から聞いたり、大瀬川の歴史に関わる遺構や名所も先人から調査したりして記録に残した中からこの3冊を作成している。9月16日には岩手日日新聞、9月30日には岩手日報に大きく掲載され、日日新聞には発行した冊子を持った板垣邦博さん・熊谷律夫さん・熊谷良悦さんを交えた写真が掲載された。

3冊とも、石鳥谷図書館に寄贈したが、新聞報道後には50名近くの方から問合せが殺到し、時間がかかるが希望者には贈りたいと話していた

振興センター・改善センター利用制限について

10月1日『みつくらお知らせ版』で施設利用制限のレベルを「3」（9月27日～当面の間）とお伝えしましたが、直後にレベルがさらに引き下げられ、現在「2」となっています。これにより、振興センターは土日祝日、夜間を含め2時間以内の使用が可能となりました。飲食については、料理教室、会議等の茶菓、弁当の飲食に限り可能です。利用人数制限、利用時間はレベル3と同等です。詳しくは振興センターまでおたずね下さい。

（問合せ先：大瀬川振興センター Tel. 45-6472）

事務室 お気軽にお入り下さい

○皆さん「JAいわて花巻のカレンダー」を観て下さい。!! 今月10月の写真は板垣弘清が撮ったもので、画題は「早暁の散居」で湯口の円万寺観音堂の東広場から南東方向を200ミリの望遠レンズにて日の出前5時15分に撮影された写真が掲載されています。

今月、板垣さんが所属している現代美術家協会では21日から31日まで「東北現展」を岩手教育会館で開催（入場無料）しますので関心のある方は是非ご覧にください。

○先日あるところから、7月末に大瀬川地内の林で「ツキノワグマ」の腐乱死体が発見されたと聞いた。その個体は成獣と思われたが、見るからに痩せこけ異臭が漂っていたとのこと。通常は、罾や狩猟で捕獲される場合が多くたまには車に跳ねられて死亡の報道もあるが、真夏の暑い最中に行き倒れるのは非常に珍しいと思われた。

今年は、春に低温、夏は猛暑があった中、お盆時期の低温や秋の雨不足でキノコや山の実りが少ないと言われており、野生動物の人里への被害が懸念されている。

みつくら

令和 3年10月15日 第348号

発行 大瀬川活性化会議

編集 「みつくら」編集委員会

花巻市石鳥谷町大瀬川 10-45-2

大瀬川振興センター 電話 45-6472

“お〜い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

大瀬川の安倍道が解明

長年、謎であった大瀬川分の安倍道が解明された。

安倍道とは、安倍忠頼から安倍貞任が前九年の役で討ち死するまでの240年間、平泉の藤原氏以前の陸奥国（岩手）の古道である。

10月2日に紫波町の歴史研究家である小田中俊雄さんから平成6年に発行された佐島直三郎著「安倍道を探る」という本を戴いた。佐島氏は江刺の歴史研究家であり、「陸奥話記」に記されてある安倍道を細かく分析し、衣川から西根町七時雨峠までを解明した書である。巻頭頁の高橋富雄盛岡大学長や細井計岩手大学教育学部教授は「当書は、陸奥話記を忠実に考証し、図面に起こすなどこれまでに無い貴重な研究成果である」と評し

ている。

この図面を辿って大瀬川の安倍道を記す。

安倍道は富沢の武田清水（ぶたすず）から大瀬川に入り、大瀬川の入り口は重之助家の直ぐ西にある黒森神社の表参道を北へ～黒森神社の杉並木を横切り～木ノ宮家の東側（現在水田）～木ノ宮家の北側古道（田屋家の林）～大瀬川自生花菖蒲園の北側道路～旧温平家屋敷～畠山造園の植木圃場～千鳥苑の坂を下り～一ノ留橋～山祇神社手前の旧百目木屋敷～助作家屋敷東脇～助作竈家の西脇～湯ノ沢道路～田中堤の南道路（現林線）～治郎兵衛竈家の北側～西栄ノ上家を北上し～紫波町片寄のオノ神跡地～旧熊谷牧場を北上・・・と記されている。

大瀬川分の8割は現在も道路跡が残っている。

